

川苔

〔紀伊國名所圖會海部郡〕妹背海苔。又和歌海苔ともいふ、此邊の磯にあり、此海苔をとるには、初冬よ、春の彼岸に終る、霜月臘月などの寒氣凜冽なるときとるを最上とす。

〔大和本草水草〕川苔。川苔モ海苔ニ似タリ、處々ニアリ、富士山ノ麓柴川ニ柴川苔アリ、富士ノリ

トモ云、日光苔ハ野州日光ノ川ニ生ズ、菊池苔ハ肥後ノ菊池川ヨリイヅ、ホシテ遠ニヲクル、アマ

ノリニ似タリ、肥後水前寺苔ハ水前寺村ノ川ニ生ズ、乾シテ厚キ紙ノ如ナルヲ、切テ水ニ浸シ用

ユ、此類諸州ニアリ、略中

瀧苔。山川ノ石ニ生ズ、短クシテ褐色、熱湯ニ浸セバ青クナル、軟鬆ニシテ食フベシ、清潔ナリ稀

ナリ、

〔和漢三才圖會九十七〕紫菜略中

富士苔。富士山ノ麓精進川村出之、形狀似紫菜、青綠色、味極美、

水善寺苔。出於肥後、色似富士苔而方形、煮之、不亂味甘美、近頃不多出、但一一如菜葉、相粘作方形

耳、

〔雍州府志土產〕菅藻。古出宇治川、載在萬葉集、今不聞有之、凡海苔海濱之所產、其種類甚多、總謂海

苔、今雖川產、又唯稱海苔、川海苔之所出、大和布留川、安藝吉田川、肥後水前寺、斯外亦在處々、

〔奇遊談三下〕貴船の川苔

洛北鞍馬の西、貴船明神は水神にして、加茂の攝社にして、世に名高き靈地なり、此御前の川瀬の

石に、六月いと暑き頃、川苔の少とあるを取集て、日に干かはかして、江戸の淺草海苔のごとく用

ゆるに、調味かくべつにして、富士川苔よりもよし、ある年東山にて物産會せしに、此川淺草にお

とらじとて、もてはやしけることなり、まかし多くは得がたし、

〔甲斐國志百二十三〕一川苔。都留郡桂川ヨリ産スル者、富士山ノ餘液ナリ、此水靈アリ、里人引